

子どもの意欲が連続する社会科学習の在り方

- 情報を持ち寄って吟味する話し合い活動を通して、さらなる意欲の向上をめざす -

社会科学研究会議

小林 勝弘¹

上関 哲士²

中本 妙子³

高士 裕之⁴

要 約

国立教育政策研究所が実施した「平成 15 年度小・中学校教育課程実施状況調査」では、子どもたちは社会科に対して肯定的な見方をしているが、あまり好きだとは感じていないという指摘がある。また、当センターの「平成 17 年度川崎市小・中学校教育基本調査」では、社会科学習の中で大切な活動である話し合ったり発表したりする学習が、反復練習などの学習と比べてあまり好まれていないという結果が出ている。昨今小学校を中心に、問題解決的な学習の在り方が議論になる場面が見られる。しかし、子どもたちが単元の終わりまで意欲を連続させて学習し、調べたことを持ち寄って話し合い、「また調べたい」という意欲を次の学習にもつなげていくことはなかなか難しい。そこで、話し合い活動を軸とした問題解決的な学習の在り方を追究し、それを通して社会科が大好きな子どもたちを育てたいと考えた。

そこで、まず研究主題の具現化に向け仮説を設定し、次に資料収集、問題解決的な学習の柱となる「学習問題」「話し合い」などの言葉の定義づけを行って、問題解決的な学習の在り方について吟味した。さらに、予備検証授業・検証授業を実施し、「教師が意識したい 4 つの意欲場面と 9 つの支援」をさらに具体化して、子どもたちの意欲の連続を図った。

その結果、話し合い活動が子どもたちの思考の深まりや意欲の向上を生み出したこと、きめ細やかな教師の支援が不可欠なこと、話し合い活動中の葛藤が大切であることが明らかとなった。また、今後の課題としては、話し合い活動が苦手な子どもたちに対する支援の在り方の検討、歴史単元以外での検証が挙げられる。

キーワード：意欲の連続、問題解決的な学習、学習問題、話し合い、教師の支援

目 次

主題設定の理由.....	50	1 研究の仮説.....	51
1 はじめに.....	50	2 研究の方法.....	52
2 社会科学習の現状から.....	50	3 子どもの意欲を連続させるには.....	52
3 川崎市総合教育センター「平成 17 年度 川崎市小・中学校教育基本調査」から.....	50	4 検証授業の実際と考察.....	56
4 川崎市総合教育センターの研究総括		研究のまとめ.....	63
主題から.....	51	1 考察.....	63
研究の内容.....	51	2 今後の課題.....	63
		参考文献.....	64
		指導助言者.....	64

¹ 川崎市立宮前小学校教諭（長期研修員）

² 川崎市立南河原小学校教諭（研修員）

³ 川崎市立京町中学校教諭（研修員）

⁴ 川崎市立日吉中学校教諭（研修員）

主題設定の理由

1 はじめに

昨年度、小学校3年生の「町で働く　　さん」という単元の授業をしたときのことである。これは、商店街にある様々なお店について、見学したり、調査したりして、それらの仕事に携わっている人々の工夫や努力について考えていく単元である。その商店街には、6～7月になると子どもたち手作りの七夕飾りが飾られ、子どもたちにとって大変興味のもちやすい地域教材でもある。

学習の過程で、それぞれのお店の販売の工夫や努力を知った子どもたちは、単元の終盤に学習のきっかけとなった七夕飾りのことについて再度考えてみることにした。学習問題は、「お客さんにたくさん買ってもらうための様々な工夫や努力をしているお店が集まった商店街は、なぜ私たちが作った七夕飾りを飾ったのでしょうか。」子どもたちはこれまでに学習したことを参考にしながら様々な予想を立てていったが、途中でどのように解決していいのかわからず、話し合いが止まってしまった。その時一人の子どもが、「ぼくたちの予想したことを、商店街の人に聞いてみようよ。」という意見を言い、次の学習につながっていった。自分たちで予想したことについて、自分たちで解決方法を考え、それを実行しようとする姿は、社会科でめざしたい子どもの姿の一つである。しかし、このように学習が展開されることはあまり多くなく、どのようにしたら最後まで子どもたちが意欲をもって学習することができるのかが課題となっていた。

2 社会科学習の現状から

国立教育政策研究所が実施した「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査」では、小学校社会科において「社会科の勉強が好きだ」「社会科の勉強は大切だ」「社会科の勉強をすれば、私のふだんの生活や社会に役立つ」など、社会科に対する肯定的な見方が前回調査を上回ったが、「社会科の勉強が好きだ」と感じている児童の割合は十分ではないと分析している。平成17年度全国小学校社会科研究協議会奈良大会の全体会指導講評の中で、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の安野功もこの分析に触れ、「社会科好きの子どもが育つ、楽しくわかる授業への改善」を課題として挙げている。

また、文部科学省の「義務教育に関する意識調査」では、社会科の「とても好き」と「まあ好き」を合わせた割合は、小学校4年生で46.0%、小学校5年生で43.5%と全教科中で最下位となっている。子どもたちにとって社会科は魅力の乏しい教科なのだろうか。その背景には相変わらず知識注入型の授業になっていて、覚えることばかりで嫌になってしまったり、調べ方自体がわからずに意欲が低下してしまったり、自分にどんな力がついているのが見えにくく戸惑ってしまったりしている子どもが多いことなどが考えられる。

3 川崎市総合教育センター「平成17年度川崎市小・中学校教育基本調査」から

川崎の子どもたちの学習の様子について、「平成17年度川崎市小・中学校教育基本調査」から考えてみることにした。図1を見ると漢字や計算という反復練習的な学習を「好き」と「どちらかといえば、好き」を合わせた割合が小4、小6、中3ともに50%を超えている。それに比べて「自分で調べたり、まとめたりする学習」や「友達と話し合ったり、発表し合ったりする学習」は、小6がほぼ横ばいなのに比べて、小4、中3は割合が下がっている。特に、中3は「友達と話し合ったり、発表し合ったりする学習」は「漢字や計算をしたりする学習」に比べて、15%以上も割合が下がっている。調べたり、話し合ったり、表現したりする学習は、社会科の中で大切な学習である。この結果を見ただけでも、社会科の抱えている問題は大きいといわざるを得ない。

調べることが好き、話し合うことが好き、そして社会科好きの子どもたちを少しでも増やすために、

教師は何かできるのかを具体的に考えてみる必要がある。

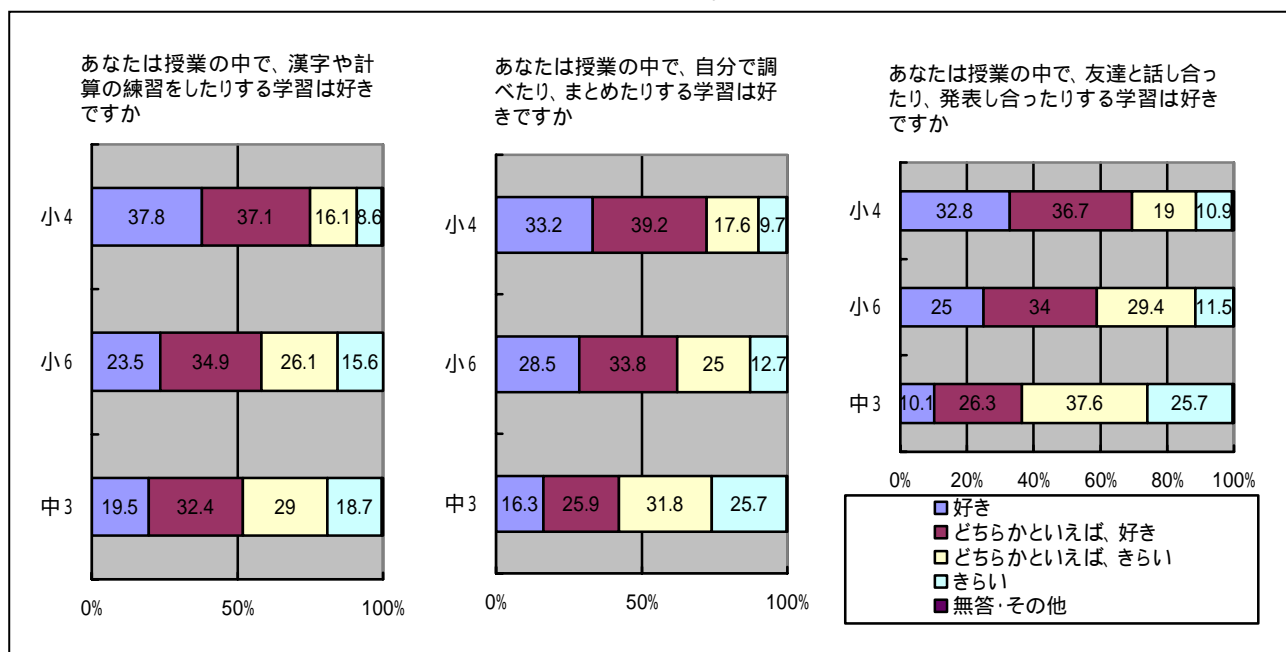


図1 川崎市総合教育センター「平成17年度川崎市小・中学校教育基本調査」

4 川崎市総合教育センターの研究総括主題から

川崎市総合教育センターでは、子どもや大人にとっての「学び」と、共に生きるための教育としての「共生」とを基点にした教育の在り方を重視して、「豊かな学びをはぐくむ川崎の教育の創造 - 共生を軸にして - 」<「自ら学ぶ」「共に学ぶ」「学び続ける」>という総括主題を掲げ、研究を進めている。

「自ら学ぶ」とは、子どもたちが出合った社会的事象に対して自分なりの問題意識をもち、その解決のために、自ら主体的に学習を進めていくことと考える。

「共に学ぶ」とは、調べ活動などで得た情報をもとに構築した自分の考えが、友達などの他者の考えに触れることにより、さらに自分の考えが深まったり新たな問題意識が生まれたりすることだと考える。その理想の学びの姿は、学習活動の中で互いに「知りたい」「聞きたい」「考え方が違うね」「どうすればよいか」などさらに考えを深めながら、お互いの存在を認め合う姿といえるのではないかと考える。

「学び続ける」とは、広い視野で見ると大人になってもあらゆる場で学び続けていくということだが、子どもたちの毎日の学習レベルで見ると、子どもたちの意欲が目の前の学習だけでなく、その次の学習にもつながっていくことだと考える。

そこで本研究では、子どもが意欲を連続して学習していく問題解決的な学習過程の在り方について考察したい。特に、情報を持ち寄って吟味していく話し合い活動をどのように工夫し展開していくかを考え、それがどのように子どもたちの新たな問題意識や学習したいという意欲につながっていくのかを研究することとし、次のような研究主題を設定した。

研究主題

子どもの意欲が連続する社会科学習の在り方

- 情報を持ち寄って吟味する話し合い活動を通して、さらなる意欲の向上をめざす -

研究の内容

1 研究の仮説

上記のような主題設定の理由から、次のような仮説を立てた。

教材や社会的事象に出合ったことによって生まれた問題意識を大切に、学習問題づくりを行う。その過程でお互いの情報を吟味し合う話し合い活動を行えば、子どもたち一人一人の考えが深まる。そのことを通してさらに意欲をもって新たな問題をつくって調べようとしたり、別の社会的事象に当てはめて考えたりしようとする子どもたちをはぐくむことができるのではないか。

2 研究の方法

本研究会議では、図2の研究構想図に基づき、次のように研究を進めることにした。

(1) 研究主題にかかわる資料収集

文献、先行研究から、子どもの意欲が連続するための社会科学習を進めていくためには、どのような学習過程が求められるのか、その在り方を探る。

(2) 研究会議で使用する言葉の定義づけ

「問題解決的な学習」「学習問題」「話し合い活動」などを本研究会議ではどのようにとらえるのか明確にする。

(3) 予備検証授業の実施

問題解決的な学習過程(教材づくり、学習問題づくり、学習計画、調べ活動、話し合い活動、学習のまとめ)を組み立てて実践する。

(4) 検証授業の実施と授業分析、仮説の検証

まず、具体的な単元の事例を通して、社会科における問題解決的な学習過程の在り方を検討し単元を組み立てる。そして検証授業を通して、子どもたちの意欲が連続する学習であったのか、話し合い活動が子どもたちのさらなる意欲の向上につながったのかを検証・分析・考察する。

3 子どもの意欲を連続させるには

(1) 問題解決的な学習とは

問題解決的な学習とは確かに子どもたち主体の学習ではあるが、子どもたちにただ考えさせたり解決を促したりするものではないということは、すでに多方面でいわれている。確かにただ教科書の内容を詰め込むだけの知識注入型の授業からの脱却をめざすあまり、問題解決という学習の方法のみが先行してしまい、十分な内容を伴わない授業も見られる。あくまでも教師が教科のねらいをしっかりとらえ、その上で問題解決の方法を学習に取り入れるといった形でなければならないだろう。

では、社会科では問題解決的な学習の具体像をどのようにとらえたらよいのだろうか。社会科の学習の導入には必ず社会的事象との出会いがある。有田和正は、『はてな?』を子どもが見つかることができるかどうか、これがポイントだと思います。それがなければ調べたり考えたりはしないだろう

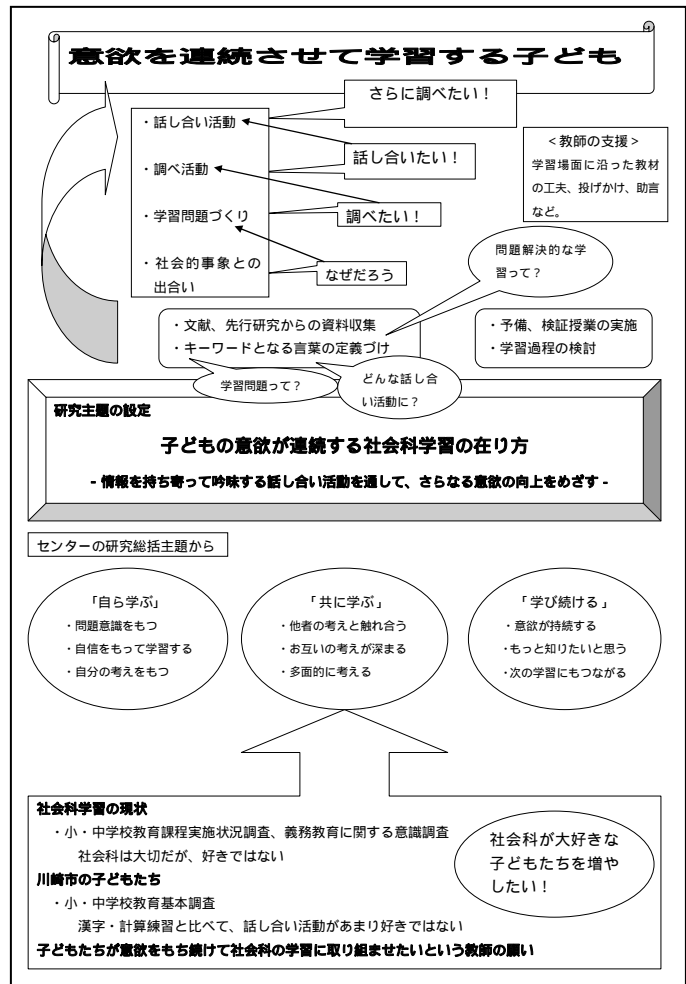


図2 研究構想図

ということです。」¹⁾と、社会的事象に出合ったときの問題意識をもつことの大切さを述べている。どのような出会いの場を教師が作り、学習のきっかけとしていくかが問われている。

また、筑波大学附属小学校社会科教育研究部では、子ども自身が感動を味わえる授業として「子どもの追究活動が展開していくなかに、教師が用意した教材を必要に応じて投げ入れ、子どもの追究と教師の教材とが互いに絡み合いながら進んでいく授業」²⁾を提案している。ここから社会的事象をより身近なものにするための教師の役割が感じ取れる。

そこで本研究会議では、「社会科のねらい、内容を明確にする」「子ども一人一人の問題意識を大切に」「追究過程において、教師の支援の在り方を明確にする」の三点を意識した問題解決的な学習を進めていくこととし、改めて問題解決的な学習を次のように定義した。

社会的事象に積極的にかかわり、自ら問題を見つけ、自分なりに考え判断していく活動を取り入れた学習。子ども自身が社会的事象に深く入り込み、切実感を持ち続けることのできる（社会的事象から生まれた学習問題を追究し、自分のこととして考える。自分にひきつけて考える。）学習

ただし、現在の問題解決的な学習には、前述した課題の他にもいくつかの問題点が見られる。社会科の学習を単なる調べ活動に終わらせないために、話し合い活動をどのように学習過程に位置づけ、子どもたちが自分の考えをしっかりとって臨めるか。そのための教師の役割は何か。これらの問題点を少しでも克服できれば、子どもたちが主体的に学習していくことにつながっていくだろう。

学習問題とは

問題解決的な学習の単元を通す一本の柱が学習問題である。問題解決を図る中心的なテーマと位置づけている場合が多いが、この学習問題の中身や作り方について論議されることが多い。

まずその中身については、子どもたちのやる気を引き出し、子どもたちが自分にひきつけて考えられる学習問題でなければならないだろう。ただし前述したように、そこに社会科としてのねらいがなければならない。北俊夫は、「教師は、どういう問題をつくらせたかが問われる。社会科には固有の内容・知識がある。だから子どもがつくった問題だから『よし』ではない。教師が、『この学習問題でいいのかな』と実は思っている、子どもがつくったのだからと見逃している場合がある。それでは学力の保障にはならない。」³⁾と語っている。また、奈須正裕も、「課題づくりを子どもに委ねるということは、すべてを子ども任せにし放任することではない。子どもが設定しようとしている学習課題が本当に追究に値する課題と言えるかを検討するのは、子どもの学習に責任を持つ教師の仕事である。」⁴⁾と述べている。教師の出番はどこか、どうかかわるのか。この学習問題づくりでもそこが問われてくるのではないか。そこで本研究会議では、子どもの意欲を引き出すべき学習問題を次のように定義し、その問題づくりも含めて考えていくことにする。

- ・ねらいに沿った、子どもたちの生活上の切実な問題
 - ・具体的事実に基づいた、子どもたちのやる気を引き出す問題
- 子どもの考えの深まりとともに変容していく。

¹⁾ 有田和正『子どもの生きる社会科授業の創造』明治図書 1982年 p.12

²⁾ 筑波大学附属小学校・社会科教育研究部『これだけは教えた基礎・基本 - 社会科 - 』図書文化社 2002年 p.20

³⁾ 北俊夫「国内研修での話」から 2005年6月13日

⁴⁾ 奈須正裕『学ぶ意欲を育てる - 子どもが生きる学校づくり - 』金子書房 1996年 p.85

さて、学習問題は単元の柱ではあるが、固定的に設定されるものではないと考える。子どもの考えの深まりとともに変容すべきものではないか。藤井千春も、「学習問題は、追究の深まりとともに発展的に変容していく。よって、質的に高い学習問題は、ある程度まで追究が進められて、その対象について多少とも知ってからでないとは成立しない。」⁵⁾と述べている。また、片上宗二も、オープンエンド化の授業設計の方法として、「導入部に設定した『小さな課題』をクリアーにさせることで、その授業で考えさせられる基礎的な内容をつかませ、それを踏まえて、『大きな課題』に挑戦させられるような授業の組み立て方」⁶⁾の必要性を語っている。

さて、学習問題の種類の中で、子どもの考えがより深まっていく学習問題は、「なぜ～なのだろう」という言葉に代表される論理的追究型のものではないだろうか。この種類の学習問題は、単元の後半に見られることが多い。本研究会議では、幾つかの子どもの問題意識からスタートし、子どもの追究の深まりとともに学習問題が論理的追究型に変容していくことを理想としたい。

問題解決の過程において

いざ学習問題をつくったのはいいが、問題を解決しようと調べ学習を進めていくうちに子どもたちの意欲が低下してしまうことがある。そこにはいくつかの原因が考えられるが、ただ教科書や資料集を写すだけの機械的な調べ活動もその一つといえるのではないだろうか。波巖は、「子どもというのは、問題解決をするとき、知的にわかったというだけではなかなか納得しない。必ず、自分の感覚で実際に確かめてみたり、実体験と比べてみたりする。つまり、一度論理的に理解したことがらであっても、『感性』で翻訳し直してみるのである。この作業を通して、初めて子どもは一つの問題が解決されたと感じるのではないかと思われる。」⁷⁾と述べている。学習問題に対する自分なりの予想を立て、それを裏づけるために調べ、そこに必ず自分の考えや思いを吹き込む。そこに一人一人の解釈が生まれ、自分だけの「情報」になる。社会科の学習でも「情報交換」という言葉が使われるが、時として書き写したことのみを相手に伝える姿が見られる。社会科の学習であるべき「情報交換」の姿は、自分の考えを入れた「情報」を交換し合い、深めることにある。問題解決の過程において、この場面に価値を見いだすことが、子どもの意欲の持続につながるのではないかと考える。

(2) 情報を持ち寄って吟味する話し合い活動とは

社会科における話し合い活動には、大きく分けて、「自分の学習の方向性を明らかにするための話し合い」と「自分の考えを深めるための話し合い」があるのではないかと考えた。ここでは単元の後半に見られることが多い後者の話し合いの様子に絞って考えていきたい。

話し合い活動の重要性について、藤井は、「話し合いとは、『対決』の場ではなく、『かかわり合い』の場である。」「話し合いは、択一的に『正解』を決めるためではなく、相互の『考え』を深め合うために行うのである。」⁸⁾と述べている。自分の考えを吹き込んだ「情報」を持ち寄り、かかわり合い、様々な角度から検討することによって、一人一人の考えの深まりにつながっていく。その過程で自分の考えが認められることで自信をもったり、自分の考えが浅いことに気づいて足りないところを調べようと思ったり、新たな疑問が生まれてさらに調べようと思ったりする。そのような話し合い活動の在り方が、子どもたちの意欲が連続する学習の中核となるのではないだろうか。そこで本研究会議では、「情報を持ち寄って吟味する話し合い活動」を、次のように定義した。

⁵⁾ 藤井千春『問題解決学習のストラテジー』明治図書 1996年 p.32

⁶⁾ 片上宗二『オープンエンド化による社会科授業の創造』明治図書 1995年 p.93

⁷⁾ 波巖『発信型の新しい問題解決学習』明治図書 1999年 p.40

⁸⁾ 藤井千春『問題解決学習のストラテジー』明治図書 1996年 p.63

学習問題について考えた自分の予想を裏づけるために、自分で資料を使って調べ、それに自分の考えを加えて持ち寄り、その情報を様々な角度から検討していくこと。この話し合いによって、問題が解決したり、自分の考えが深まったりする。

さて、話し合い活動には幾つかの形式がある。「二人情報交流」「グループ別話し合い」「ディベート式全体話し合い」「基調提案式全体話し合い」などだが、それぞれの形式には長所や短所がある。どの話し合いの形式が有効であるかは、その学習のねらいや内容によるところが大きい。また学習問題の変容を考えると、話し合いをその時間内で切らずに次の時間に持ち越して、さらなる調べ活動を積み重ねる場合もある。その点を十分に踏まえて検証していく必要があるだろう。

(3) 教師が意識したい4つの意欲場面と9つの支援とは

前述したように子どもの意欲が連続する学習には、教師の細やかな支援が必要である。北尾倫彦は、授業でのほめ方として、具体性(具体的な事実に即してほめる)と即時性(すかさずほめる)を挙げ、「教師からほめられることによって、子ども自身が自分の長所に気づく必要があり、それが契機となって有能感をもつことができればよいのである。」⁹⁾と述べている。問題解決的な学習は一人一人に寄り添う場面が多く、このほめ方のような具体性と即時性をもった支援がより必要となってくるのではないだろうか。そこで、本研究会議では具体的に4つの意欲場面を取り上げ、そこでどのような支援ができるのか考えてみた。

表1 教師が意識したい4つの意欲場面と9つの支援

問題意識が芽生えるような刺激的な教材や社会事象との出会いをつくる。	「なぜだろう」
子どもたちの問題意識をもとにした学習問題を共につくり上げる。	
学習問題についての予想を考える場面を保障する。	
どのように調べたらよいか、調べる内容の特性に応じた助言をする。	「調べたい」
調べ活動をもとに、子どもが自分の考えをもてるように支援する(時に業間支援も)	
根拠をもって、子どもが自分の考えを言えるように支援する。	「話し合いたい」
話し合いで、子どもたち一人一人の考えが、互いに啓発しあうように配慮する。	
子どもが自分の考えをさらに深めるために、不思議に思ったことやもっと調べたいことなどを考える場を設定する。	「さらに調べたい」
子どもに応じて、単元終了後も、新たな学習問題づくりについて相談する。	

言うまでもないが、その場面場面での支援の仕方は一人一人違う。子どもたちの能力や適正を把握し、それぞれに合った支援をしていく必要があるだろう。

(4) 意欲と知識について

意欲が連続している学習は、子どもたちにとって確かに楽しいものかもしれないが、どのような力がついたかということも考えていかなければならない。北尾は、「本当によくわかったときには、プラスの感情(満足感、安定感、充実感)が生じ、そのことが再び学習課題に取り組もうという意欲を生み出す。したがって、わかることが意欲喚起の前提条件であるといえよう。」¹⁰⁾と、意欲と知識は切り離せないものであることを述べている。また、有田は、「何か一つ身についたら、それを応用できるようにすることでしよう。応用が効かないことには、その学びは価値がないこととなります。」¹¹⁾と述べている。意欲をもって学習して身についた知識や社会的なものの見方・考え方が、別の社会的事象に出合ったときにも応用できるように、教師は学習時間内だけでなく、学習時間と学習時間の間や単元終了後も支援していく必要があるのではないだろうか。

⁹⁾北尾倫彦『意欲と理解力を育てる』金子書房 1984年 p.61

¹⁰⁾北尾倫彦『意欲と理解力を育てる』金子書房 1984年 p.90

¹¹⁾北俊夫・有田和正『対談・小学校教育課程 社会科の授業をどう創るのか』明治図書 1999年 p.74

(5) 話し合いを軸にした単元構想図

以上の考え方を単元の構想図にまとめることで、考えを整理し、検証していきたい。

4 検証授業の実際と考察

取り上げる単元のねらいを受けて、子どもたちの意欲を連続させるために、どのような教材や学習問題が適しているのか、どのような話し合いが望ましいのかを考え、学習過程を組み立てた。また、理解度の異なる三人の児童生徒が、1時間目から単元終了後まで、どのような学習をし、どのような考えの変容があったか。どのような願いがあったかに注目した。

その方法として、毎時間の学習の取り組み方や発言、毎時間終了時に、「思ったことや考えたこと」「疑問に思ったことや次に学習したいこと」などを記述させた文章や単元終了後のアンケートをよりどころとし、検証・分析・考察した。小6、中1、中2

の3本の検証授業を行ったが、ここでは小6と中1の授業を取り上げ考察する。

(1) 検証授業 小学校6年「西洋に追いつけ追いこせ ～明治時代の国づくり～」

江戸末期からのこの時代は調べる事柄が多く、また取り上げるべき人物も14人に上る。北も「従前から、明治維新以降の学習については、日本の歴史全体の学習のなかでも、人物の働きを中心にした指導が難しいとされてきた。」と前提した上で、小単元のねらいに即して重点的に取り上げる人物を教師が選択し、その人物の働きを中心に学習を組み立てる方法を示している¹²⁾。ここでは明治時代の様々な出来事に直接的・間接的にかかわった伊藤博文を中心に取り上げ、彼の人生から短い時間で劇的な変化を遂げたこの時代を、前の時代や現代と比較して予想し、調べ、考え、話し合いながら意欲を連続させたいと考えた。

単元目標

- ・伊藤博文の人生と関連させながら、江戸幕府が倒れるまでの経緯や明治政府がめざした新しい国づくりと政策について調べ、欧米の文化を取り入れつつ近代化を進めたことがわかる。
- ・新しい国づくりの方向性のもと、我が国の国力が充実し、国際的な地位が向上したことがわかる。

単元の流れ(14時間扱い・は時数)

表2 単元の流れ(小6)

<ol style="list-style-type: none"> 伊藤博文が生きた時代を予想し、学習計画を立てる... <ul style="list-style-type: none"> ・旧千円札を使って導入し、伊藤博文に対する興味をもつ。 ・博文の年表を提示し、どのような時代なのか予想し、学習計画を立てる。 黒船来航が幕末の日本に与えた影響について考える... <ul style="list-style-type: none"> ・博文が神奈川県に警備に行った事実から、黒船が来航したことについて調べる。 ・日本が開国したこと、不平等条約を結んだことに気づく。 江戸幕府の終わりと開国後の日本について調べる... <ul style="list-style-type: none"> ・この時の博文の考えを予想し、こっそり留学した理由について考える。 ・この時の倒幕の様子について調べ、新しい世の中が始まったことに気づく。
--

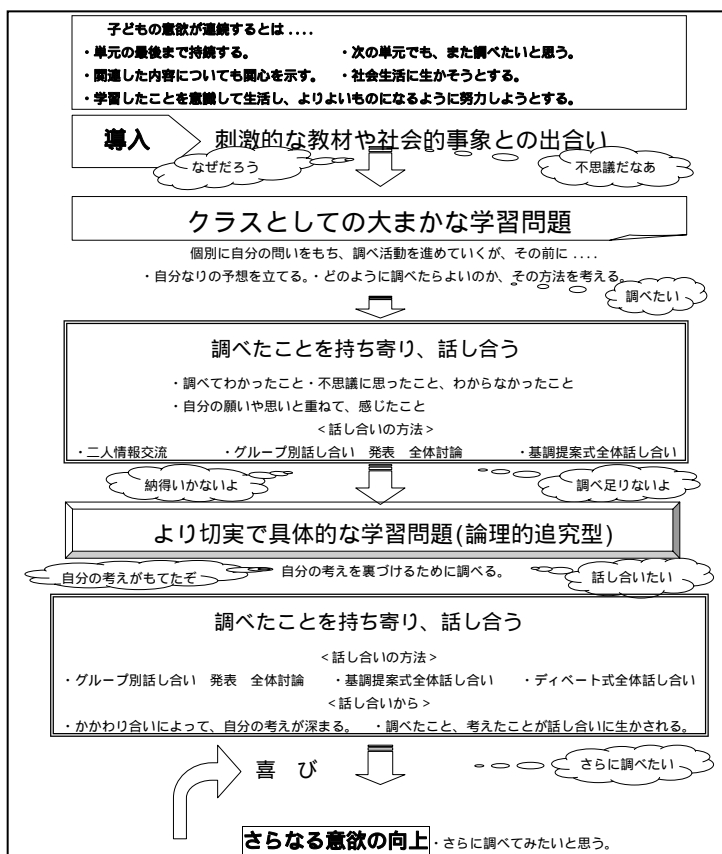


図3 話し合いを軸にした単元構想図

¹²⁾ 北俊夫 『あなたの社会科授業は基礎・基本を育てているか』 明治図書 2005年 p.129

4.5.新政府の改革（廃藩置県を中心）について話し合う...	・新政府の主な改革について調べる。 ・博文たちが提案した廃藩置県を取り上げ、その意義について話し合う。
6.文明開化について調べる...	・「文明開化の頃の町」の絵を見て、町や人々の変化について興味をもつ。 ・博文たちが鉄道づくりにこだわっていた理由を考える。
7.国会開設と大日本帝国憲法について調べる...	・博文たち岩倉使節団がヨーロッパに行った理由を考える。 ・「演説会」の絵を見て、人々は政治に何を求めていたのかを調べる。
8.条約改正までの経緯について調べる...	・博文が初代内閣総理大臣の頃の外国との関係について確認する。 ・「ノルマントン号事件」の絵をもとに、その事件の背景や条約改正の動きについて調べる。
9.10.日清・日露戦争について調べる...	・2枚の「ピゴーの風刺絵」を見て、気づいたことを発表し合う。 ・博文が2回目の内閣総理大臣の頃に起きた日清戦争、その後の日露戦争について調べる。
11.科学の発展について調べる...	・千円札をきっかけに、科学の発展に貢献した野口英世について調べる。 ・英世以外の人物についても調べる。
12.13.博文が生きた時代について話し合う...	・これまでの学習したことを生かして話し合い、総合的にこの時代をとらえる。 ・この時代の国づくりについてキャッチフレーズをつくる。
14.伊藤博文の死後の日本の姿を予想する...	・博文の死後、日本はどのような国づくりをするのか予想し、今後の学習の見通しをもつ。

教師が意識したい4つの意欲場面と9つの支援 表3 4つの意欲場面と9つの支援（小6）

教材や社会的事象との出会い	単元を通じて伊藤博文の年表を扱い、常時掲示することで、この時代の出来事について継続して関心がもてるようにする。 1時...旧千円札や伊藤博文の年表により、これからの学習に意欲をもてるようにする。 2時...様々に描かれたペリーの肖像画や黒船来航時の絵を提示し、児童の興味・関心を引き出す。 6時...文明開化の頃の絵に着色する活動を取り入れ、さらに興味を深めるようにする。 7～10時...自由民権運動の演説会や日清・日露戦争の状況を表した絵を提示し、気づいたことから学習を展開していく。
学習問題の設定	児童の問題意識だけで学習問題をつくるのではなく、学習のねらいが達成できるような問題設定を教師が心がけ、児童に提示していく。 5時...なぜ廃藩置県をする必要があったのか考える場面を設定できるよう、前時でくわしく調べるようにする。 7時...伊藤博文の国づくりのねらいはもともと何であったか、ノートや振り返りカードをもとに考えるように促し、次時の学習問題を自ら考えられるようにする。
予想場面の保障	新しく出てくる事象について、「なぜ？」と問いかけ、これまで学習したことにヒントが隠されていないか考えるように促す。予想の際には自分なりの理由が必ず言えるように、思いや考えをノートに記録させるようにする。
調べ方や方法の助言	教科書や資料集などの資料を使って、調べてわかったことは必ずノートに書くように促し、形に表すことで学習の達成感を味わえるようにする。また辞書を用意し、わからない言葉や難しい言葉が調べられるように配慮する。
自分の考えをもたせるための支援 根拠をもって自分の考えを言うための支援	授業の最後に記入した振り返りカードにコメントを書き、児童が自信をもって学習に取り組めるようにする。ワークシートも吹き出しに書き込めるようなものにし、発言したくなるような工夫をする。 毎時間必ず友達と意見交流する活動を設定する。 4時...2人ずつで立場を決めて、江戸時代のくらしを根拠に話し合いをするように促す。 12時...これまでの学習のつながりを考えるように促し、根拠となりそうな事柄については掲示しておく。 12時と13時の間...内容の広がりをもてるように、二人情報交流の時間を設定する。
話し合いの配慮	毎時間、ノートや振り返りカードにコメントを書く際、「さんと一緒だね」「これは次の時間言ってみよう！」など、進んで意見を言いたいという気持ちになるような書き方の工夫をする。 4時...なかなか意見の言えない子に配慮し、2人組で考え、どちらかが意見を言うようにする。 12時...友達の考えについて、自分はどのように思うか判断しながら意見を聞いたり、考えを述べたりするよう声をかける。 13時...「この時代はいい時代？」という発問に対して、自分の考えが明らかになるような板書の工夫をする。
さらに調べたいことを考える場の設定	疑問に思ったことは、振り返りカードに書くように促す。それらの疑問については、次時または単元終了後に解決できたかどうか個別に聞き、解決できていなければ、資料などを使って調べるように声をかける。 5時...廃藩置県以外の改革は西洋に負けない国づくりにつながっているのか、興味をもったことについて自由に調べてよいことにする。
単元終了後の取組について	14時...伊藤博文の死後の日本の動きについて予想する時間を設定する。さらに、関心の高い児童を中心に調べてみたいことがないか声をかける。

12、13時間目の話し合い活動の様子 表4 話し合い活動の様子（小6）

話し合い活動の抜粋（12時間目）	分析・考察など
この時間のねらい	
伊藤博文が活躍した頃の日本の国づくりの様子について、新政府による様々な改革や二つの戦争などと結びつけて考えようとしている。	
学習問題「伊藤博文が生きた時代、日本はどのように変化したのだろう。」	・支援6の掲示物を参考に、これまで学習したことを生かして、この時代を多面的に見ていく学習問題である。

<p>改革がもたらしたもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童「身分の差別はあったが、(博文は)やりたいことをやったから、日本がいい方向に行った。」 ・C「改革には、日本を一つにまとめたい、外国に負けない国づくりという二つの考えがあった。」 ・児童「廃藩置県など、日本がバラバラになっていたのを一つにまとめた改革もあった。」 ・児童「税が100%政府に入る。江戸時代より、よくなっていった。」 <p>この後も廃藩置県や地租改正などの改革を通しての日本の変化にせまった発言が続いた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童「日本の中の戦争が減った。」 <p>外国からの影響、圧力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童「外国の文化を取り入れていった。」 ・教師「何か足りないものがある。」 <p>近くの人と話し合う。ある児童の発言によって、外国からの影響という話し合いから、ペリー来航から始まった外国からの圧力という話し合いに流れた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童「外国の真似をした。外国は強かった。」 <p>総合的に話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師「これらを振り返って、共通しそうなことは？」 ・児童「外国の文化を取り入れながら、外国に負けない国づくり」 ・児童「外国に追いつくようにがんばったけど簡単じゃなかった。」 ・C「外国に負けない国づくりにするには、日本がまとまっていく必要がある。」 <ul style="list-style-type: none"> ・教師「この時代は、いい時代だった？」 <ul style="list-style-type: none"> ・B「その時代に生きていた人は、戦いがあつたり、金を取られたりして嫌だったが、その後平和になった。」 ・児童「戦いが多くて嫌だったが、日本が成り立ってよかった。」 <ul style="list-style-type: none"> ・C「平和にはなったけど、自分の国を高めようとして朝鮮を植民地化しようとしたりして、平和じゃなくなる気がする。」 <ul style="list-style-type: none"> ・児童「国としてはいいけど、人としては嫌な国だ。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・この発言から話し合いがスタートした。今日の話合いの流れを決めた意見。ここから、明治に行われた改革のよさについての意見が続くことになる。 ・この二つが押さえられていれば、よく理解していることになる。Cさんは、学習したことや調べたことが、知識として自分のものになってはいるが、学習がすでに完結しているところもあり、この時代をあまりよく思っていないCさんの考えがさらに深まっていくには、感情論や道徳観による揺さぶりが必要かもしれない。 ・学習問題の主語は、「日本」。しかし児童は、日本国民ではなく、伊藤博文つまり、日本政府の視点でこの時代を見ていた。 ・日本がまとまっていくよさを裏づけた発言。この後の何人かの発言もその観点からの意見となる。 ・Cさん以来の外国を意識した発言である。ここから話が、文明開化や条約改正などに飛び、少しづれることになる。ここまでは、これまでの学習の振り返りの意見が続いていたので、話し合いになっていなかった感があつた。 ・真をついた意見。外国の真似という観点について、少し話し合いをしてみてもよかった。 ・国づくりの基本線がしっかりととらえられている。しかし、この考え方は、これまでの学習で培ってきたものであるため、この時間におけるCさん自身の深まりはあつたのかどうか興味深い。 ・歴史学習においては、このような「時代の是非」を問う質問はよくないといわれることがあるが、この時代を評価する目的ではなく、いろいろな見方でこの時代をとらえるという意味で、児童が自分の考えを見つめ直す転機となった。 ・Bさんの発言の根底には、当時の日本の国民という視点がある。たくさんの児童が、日本政府という立場で意見を言っているのに対して、大変印象的である。きっと、他の児童が言うほど、日本の国はよくなっていないと思っていたのではないだろうか。 ・冷静な歴史認識から、自分の感情の一端が見られた場面。このような葛藤が、ある意味必要なだろう。 ・ここまでの話し合いを整理しきれない児童にとっては、頭の中が混乱してしまったようだ。 ・今日の話合い活動を象徴する意見である。
<p>話し合い活動の抜粋(13時間目)</p>	<p>分析・考察など</p>
<p>(12時間目と13時間目の業間) BさんとCさんの話し合い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・C「Bさんの意見は、私と違う視点から見ていたので面白いと思いました。平和と戦争、自分のあらゆる視点から意見をぶつけることができ、自分にとってもプラスになりました。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の話し合いでは、整理しきれないところがあつた。特に、いい時代かどうかで揺れていたBさんとCさん呼び、二人で討論させた(支援6)。その後、左のような視点の違いに気づいたCさんはすばらしい。教師も高く評価し、Cさんをほめた。
<p>学習問題「伊藤博文たちが生きた時代は、どのような時代だったのか」(前時を受けて)</p> <p>黒板に、「よい時代」「よくない時代」が名札を貼って、全員が現在の考えを示した。</p> <p>よいことと悪いこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童「外国と交流して、いろんな文化が取り入れられた。」 ・B「外国と争えば、いいことばかりじゃない。」 ・C「外国と争う時点で平和じゃない。」 ・児童「外国の文化を取り入れると技術が上がる。戦争は仕方ない。」 ・児童「戦争にも意味があつた。それで不平等条約は改正できた。」 ・C「日清、日露戦争は、条約を改正させるためにやったのかも申しれないが、外国に負けないのと対等に付き合うのは違う。強くなるのはいいが、朝鮮を併合したりしたのはよくない。」 ・児童「伊藤博文がめざした国づくりは、戦争で勝つ力じゃなく、技術を高くしていこうということ。」 ・A「技術を戦争に使ったら意味がない。」 <p>この後、『庶民の立場としての日本』、『文明を開化した日本』という視点で話し合いが進んだ。</p> <p>戦争をめぐる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師「もし戦争がなかったら、どうなっていたらう。」 ・児童「戦争をしなければ他の国に認められなかった。」 ・児童「清とロシアも朝鮮をねらっていた。日本も侵略されていたのでは。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習問題から少し焦点を絞っている。 ・支援7をすることで、現在の自分の考えを確認する機会をつくっている。「よい時代」「中間」という意見が数名ずつで、残りは「よくない時代」という意見。この状態で話し合いがスタートした。 ・「よい時代」派 外国の文化や技術が入ってきて発展した。 ・「よくない時代」派 他の国と戦争をしてしまった。この2つの意見を軸に、活発な話し合いとなった。これまでの学習で得たことを生かして、それを結びつけながら発言する児童が多かった。また、この時代の時代背景を踏まえた上で発言している児童と、Cさんのように、時代背景をわかってはいるが、現代に生きる自分にとって戦争はいけないんだという思いで発言している児童との話し合いにより、いくつかの視点で考えていくことの大切さが浮き彫りとなった。大変難しい内容であつたが、一人一人がよく考えていることが、振り返りカードより確認できた。 ・「もし～」という発問は、事実が既に存在する歴史の学習では、すべきでないという声もあるが、この場合、客観的に戦争を見つめる上で、意味ある発問であつた。

<ul style="list-style-type: none"> ・C「日本という視点では戦争は無駄であると思うが、外国という視点では戦っていかないと認められず、逆に日本がやられてしまう時代だった。」 ・児童「明治にはいろいろな改革があったが、そもそも戦争をやるつもりはなかったのでは…。いい時代だったと言える。」 ・C「改革によって、日本という国は強くなれたが、改革がいやな方面にも出ていた。」 <p>キャッチフレーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師「この時代にキャッチフレーズをつけましょう。」 ・『その時、日本が動いた!』『変わりすぎた日本』『犠牲が出ても外国に負けない国づくり』『今の時代への第一歩』『強いぞ日本!でもどうする?』『いいところも悪いところもあった白黒の時代』など 	<ul style="list-style-type: none"> ・心の中で葛藤していたCさんにとって、客観的にこの時代を見つめることができたのではないだろうか。新たに『世界』という視点をつかむことができたCさんは、単元終了後に自ら進んで『第一次世界大戦』について調べていった。 <p>・プラス面、マイナス面の両方の要素を盛り込んだキャッチフレーズが多く、話し合いが生きていたことを意味している。クラス全体では、左の太字のキャッチフレーズが多くの子の支持を得たが、『強いぞ日本!でもどうする?』など、次の学習につながるキャッチフレーズもあったので、ここで取り上げる方法もあった。</p>
--	---

着目児童の学習の様子

表5 着目児童の学習の様子(小6)

児童名	A	B	C
11時までの学習の様子	江戸末期から明治に至る変革期について、「頭が混乱した」と時代の流れがとらえにくかった様子であった。これまでの学習では、ノルマントン号事件のことが一番記憶に残った様子で、「条約改正の方向に日本を動かした事件だった」と振り返っていた。また、この時代に進歩した「 技術 」に着目し、「日本は技術が進歩したから政治や文化もよくなってくるだろう」と自分なりの展望をもっていた。	農民や町人の立場 になって考えている場面が多く見られた。「憲法をつかったことで、 税金 が国に入るようになり、外国とちゃんとした貿易ができるようになった。」ことが大切だと考えている。「条約が改正された時代には嫌なことがたくさんあったと思うけど、ペリーの来航をきっかけに開国し、今の日本のくらしができていることはありがたい。当時の人のことを考えるとかわいそうかな」という心の揺れも見られた。	江戸末期から明治は、あまりいいイメージのない時代であるととらえている様子であった。これまでの学習で、「 廃藩置県 の時にわかった 新政府の二つの目的(日本の国をまとめる、外国に負けない国をつくる) が大事だ」と感じている。「明治は国をまとめ、外国から見ても強い国になったからすごい。今の時代にかなり近づいてきたな」と学習を振り返っている。
12時の学習の様子	「ノルマントン号事件が起こって条約改正につながった。いい時代と悪い時代の間で、いまだ革命の途中の時代なんだと思う。」と発言したが、それ以外の場面では、話し合いに参加できなかった。	この時代の日本のよさについて認識している発言はあったが、話し合いを通して、「外国のものは入るようになったけど、不平等な条約を結ぶことはよかったのか悪かったのかわからない。当時の人たちのおかげで今のくらしができることはありがたいが、当時の人はかわいそうだと思う。」と 日本政府の方針と国民の立場で、揺れ動いていた。	「日本の国をまとめることと、外国に負けない強い日本にするという目標が伊藤博文らにあったのでは…」という考えを柱として、積極的に話し合いに参加していた。しかし、話し合いが進むにつれて、 日本の国力の高まりと戦争という事実と、「いい時代だったのかな?」という思いとの間で葛藤したまま、授業が終了した。
教師の支援	話し合いでは、ノルマントン号事件以外のことでは意見が言えず、思考の深まりは感じられなかった。次時に向けて、 その事件以外のことにも目を向けている友達と二人情報交流を行って、広い目で見られるように配慮した(支援6)。	話し合いでは、友達の様々な角度からの見方に興味を示し、 関連づけようと努力していた。 ただ、心の揺れが見られたので、次時に向けて、同じように葛藤していたCさんと二人情報交流をすることにより、 自分の考えを整理して次時の話し合いに参加できるように配慮した(支援6)。	これまでの学習で得た知識をもとに、友達が納得できるように積極的に発言していた。話し合いを通してどの視点でこの時代をとらえたらいいのか悩んでいたのも、同じように心が揺れ動いていたBさんと二人情報交流を行うことで、 視点を明らかにできるように配慮した(支援6)。
13時の学習の様子	「技術は高くなったけど、2回も立て続けに戦争をしていたら意味がない。なぜなら技術はそんなことに使うものではないから。」と発言するなど、意欲的に話し合いに参加していた。 幾つかの角度から、この時代をとらえようと努力していた。	事前の二人情報交流では、「戦争」「平和」ということを意識して発言していた。話し合いを通して、「戦争はよくないことだけど、戦争したことで新しいものが入ってきたし、どんどん日本がよくなってきたのでよかったのかな。この戦争は仕方なかったのかも知れない。」ととらえていた。Cさんと事前に話し合いをしたことで、広い視野で物事を考え、多くの発言をすることができたので、そのことを評価し、ほめた (支援7)。	「Bさんの言うように、いい国になったと思うけど、日本が外国に従えようとしたらまた平和じゃなくなる気がする。」と、 現代に生きる自分の視点からの発言が多かった。 ただ、この頃の時代背景はきちんととらえており、逆に日本がやられていたかも知れないという考えもみんなに伝えていた。時代背景と自分の道徳観の間で葛藤していたが、よく考えて発言していたのでその姿勢をほめた。これからの日本はどうなっていくのか興味をもっていたので、 調べてみることを勧めた(支援8、9)。
教師の支援	「上がった技術をどう使えばいいと思ったのかな? この後の日本はどうなっていくのかな、その辺りも考えてみよう。 」と振り返りカードにコメントした (支援7)。		

考察

この時代に起きたたくさんの出来事を伊藤博文の人生を軸にとらえたことで、覚えることだけで終わりがちな単元を興味をもって最後まで学習することができた。また、時代を総合的にとらえるために、話し合い活動を2時間続け、その時間の中に二人情報交流を行うなど話し合いがより活性化するように支援したのが効果的だった。話し合い活動を通して、「日本はどうなっていくのだろう」という新たな疑問が生まれていった。

(2) 検証授業 中学校1年「中世の日本」

この単元では、12世紀から15世紀における武家政権の成立とその後の政治、社会、文化を学習していく。まず、鎌倉幕府の始まりから室町時代への武家社会の展開を、御家人や庶民など様々な立場から考えさせようとした。そこで、問題意識が芽生えるように「武士の館」の絵やビデオ、写真などの視覚的教材を活用し、その時代のイメージを豊かにつかませようとした。次に、東アジアとのかかわり、都市の繁栄や農村の自治についても、「室町時代の港町」の絵とその当時の時代背景とのズレから学習問題をつくり、調べて話し合うことで、中世という時代について多面的に考えさせようとした。

単元目標

- ・鎌倉幕府の成立・南北朝の争乱と室町幕府、応仁の乱後の社会的な変動について調べ、武家政権が確立し展開していった過程を理解するとともに、元寇、日明貿易など東アジアとのかかわりについても気づくようにする。
- ・農業などの諸産業が発達して、都市や農村に自治的な仕組みができたことを調べ、都市の繁栄や農村の自治的な高まりを理解するとともに、武士や庶民の活力を背景に生まれた新しい文化の特色についても気づくようにする。

単元の流れ(11時間扱い・は時数)

表6 単元の流れ(中1)

1. 中世の年表を作り、武士の時代を大観する...
・ 中世の出来事を年表に記入し、小学校での既習事項を確認する。
・ 関心をもった事に印をつけ、学習の見通しをもつ。
2. 「武士の館」の絵から、武士の様子を読み取り、鎌倉幕府のしくみについてまとめる...
・ 「武士の館」の絵から気づいたことを発表し合い、武士が訓練している理由を考える。
・ 武家社会の特色を知り、鎌倉幕府の成立や仕組みについて調べる。
3. 4. 5. 鎌倉時代の歴史的事象について調べる...
・ 承久の乱について調べ、御家人がどう考え行動したか、どう幕府の強化につながったのか考える。
・ 元寇について調べ、御家人がどう考え行動したか、どう幕府の衰退につながったのか考える。
・ 鎌倉幕府の崩壊、建武の新政について調べ、後醍醐天皇・足利尊氏のとった行動について考える。
6. 7. 8. 金閣・銀閣が建てられた頃について調べる...
・ 金閣・銀閣について調べ、この頃の文化の特色に気づく。
・ 応仁の乱を始め、この頃に起きた出来事について調べる。
・ 足利義満や義政はどんな思いで金閣・銀閣をつくったのか話し合う。
9. 10. 「室町時代の港町」の絵から、人々の生活の様子を読み取り、なぜ活気にあふれているのか話し合う...
・ 「室町時代の港町」の絵から気づいたことを発表し合う。
・ この頃の都市や農村の様子について調べる。
・ 戦いがあった時代なのに、人々がなぜ活気にあふれているのか話し合う。
11. 中世はどんな時代だったかまとめる...
・ 中世は武士や庶民にとってどんな時代だったのか考える。

教師が意識したい4つの意欲場面と9つの支援

表7 4つの意欲場面と9つの支援(中1)

教材や社会的事象との出会い	2枚の絵を単元の中心教材として位置づけ、興味・関心をもって学習に取り組めるようにする。 2時...「武士の館」の絵を提示し、武士の生活について読み取らせるようにする。 3時...北条政子の言葉(再現ビデオ)により、臨場感をもって政子の思いについて考えさせるようにする。 4時...元寇の様子(再現ビデオ)により、戦いの様子について実感できるようにする。 7時...「室町時代の港町」の絵を提示し、学習問題づくりにつなげていく。
学習問題の設定	学習のねらいが達成できるような学習問題が設定できるように心がける。 2時...「武士の館」の絵の読み取りから、武家社会の様子を考えさせるようにする。 7時...金閣・銀閣から足利義満・義政の時代をとらえる学習問題を設定する。 9時...戦いの世の中なのに、なぜ「室町時代の港町」のような社会が生まれたのか、という矛盾を学習問題につなげていく。
予想場面の保障	自分なりの予想をもち、それが言えるように心がける。 7時...学習問題設定後に時間をとる。 9時...学習問題設定後に時間をとる。 10時...「10年後、20年後はどうなっていくのか」と投げかけ、次の単元へつなげていく。
調べ方や方法の助言	ワークシートに教科書・資料集など調べる箇所を示す。学習問題を考えるには、どのようなことを調べたらよいのか考える時間をとり、それから調べさせるようにする。
自分の考えをもたせるための支援	ワークシートを工夫し、どこに焦点を当てて考えたらよいのか助言する。
根拠をもって自分の考えを言うための支援	ワークシートに書かれた考えを評価し、発言のポイントをコメントする。

話し合いの配慮	1時...「武士の館」の絵から気づいたことについて、グループで話し合い、意見が言いやすい場を設定する。 4～5時...「幕府の対応」「後醍醐天皇と足利尊氏」など対立の軸をつくり、活発な話し合いになるようにする。 8時...義満・義政の思いを、当時の時代背景をとらえて意見を言うように促す。 9時...「室町時代の港町」の絵から気づいたことをグループで話し合い、意見が言いやすい場を設定する。 10時...友達の意見と比較して、自分の意見が同じなのか、違うのか考えるように促す。
さらに調べたいことを考える場の設定	11時...単元の振り返りとともに、今後の展開を考える時間を設定する。
単元終了後の取組について	「室町時代の港町」の絵について、まだ解決できていない疑問をもって生徒に声をかけ、解決の手助けをする。

10 時間目の話し合い活動の様子


表 8 話し合い活動の様子(中1)

話し合い活動の抜粋	分析・考察など
この時間のねらい	
「室町時代の港町」が活気にあふれている理由について話し合い、その背景として農民の自治や貿易の発展などがあったことに気づくようにする。	
<p>学習問題「15世紀は、戦いがあった時代なのに、なぜ活気にあふれているのか？」</p> <p>・教師「調べ足りないところを調べましょう。」</p> <p>活気あふれる理由</p> <p>・生徒「応仁の乱で村が破壊されたから、それなら自分たちで政治をやろうという気になって活気が出た。」</p> <p>・生徒「役人の支配から離れていたから。」</p> <p>・E「座があった。自分たちの政治の中で商売をしているから。」</p> <p>・生徒「村で一揆を起こしたので、一目置かれているから。」</p> <p>・生徒「日明貿易で、自然と物がそろっているから、活気にあふれている。」</p> <p>下剋上、身分差</p> <p>・教師「自由ってどんな時に感じる?」「指図していた人は?」</p> <p>・D「守護とかがなくなって、農民・商人の力が上がっていった。均等になった。差が縮まって自由にさせるようになった。」</p> <p>・E「ここは、港に面しているから強くなっているけど、内陸の方の農民は物も入ってこないし、税をとられているから、均等にはなっていないと思う。ここは港町だから、恵まれている。」</p> <p>・F「自分たちで政治をするということは、自分たちに負担がかからない。だから、貧富の差がないはず。でも、絵に貧しい人たちがいるのは?」</p> <p>新たな学習問題へ</p> <p>・教師「この絵から10年後、20年後はどうなっていくのか?」</p> <p>・F「このままいい時は続かない。商人の力も弱まる。町は生き生きとしなくなる。」</p> <p>・生徒「物は売れる。商人の力がますます強くなる。」</p> <p>・D「いや、武士が盛り返す。」</p> <p>・生徒「守護が力をつけてくる。」</p> <p>・E「貧しい人と豊かな人がぶつかり合う。」</p> <p>・F「自治をやっているけど、リーダーが必要になってくる。何でも自由になってはいかない。」</p>	<p>・前時の「室町時代の港町」の絵から、気づいたことを出し合う中で、つくり上げた学習問題である(支援2)</p> <p>・教師は机間指導をしながら、もう一度絵に立ち返ること、友達と情報交流を行うこと、前時に立てた予想を思い出すことを助言していた(支援4)。前時に調べたことを見直し、そこから調べ活動を展開している子をほめた。</p> <p>・応仁の乱でこの村が破壊されたかは、判断できない。地図を見て、堺なり博多なりの場所を確認する必要があった。</p> <p>・前時の調べ学習が生きている発言。友達の発言にも関連させている。</p> <p>・ここまで、活気にあふれている理由が、二つ出てきている。</p> <p>農民の自治 貿易による発展しかし、自治の考え方も「役人の統治下であった」「役人の支配から離れていた」「一揆を起こして勝ち取った」と、理解が多様だったので、整理してみる方法もあった。</p> <p>・「室町時代の港町」の絵の頃の身分についてのとらえ方を確認する発問。一問一答式で思考の流れをつくっていく。</p> <p>・Eさんの発言は、一概に言い切れないところもあるが、よく話を聞いて今までの流れをまとめている。事象の真をつく発言(資料の裏づけがあれば、もっと説得力があったが...)といえる。ここからも新たな学習問題が生まれている。みんなで解決していく方法もあった。</p> <p>・Fさんには、『自治=自由』『階層社会=貧富の差』の考え方があり、この間でかなり揺れ動く。農民の自治の実態についての疑問から、リーダーの誕生、群雄割拠の時代へ意欲がつながりそうだった。Fさんのこのようなこだわりを大切にしていきたい。教師も、「いいところに気づいた」と高く評価していた(支援6)。</p> <p>・次の単元につなぐ発問である。これは、支援3である。予想の時間を保障することは、次の学習の意欲を高めることにつながってくる。これまで学習してきたことに基づいて予想したり、ただ思いつきで予想したりとその中身は生徒によって様々であるが、その如何に問わず、次の学習につなぐ大切な活動である。</p> <p>・様々な視点での予想が出されたが、次の単元での視点づくりにもなるので、それぞれの身分(立場)ごとに整理する必要があった。</p> <p>・次の時代のキーワードの一つである「リーダー」という言葉が出てきた。このような言葉をきっかけに、次の単元を導入するという方法もある。</p>

着目生徒の学習の様子

表 9 着目生徒の学習の様子(中1)

生徒名	D	E	F
9時までの学習の様子	「武士の館」「室町時代の港町」の絵を読み取る学習では、発想豊かに意見を出すことができたが、 思いつきの発言 が多く、自分の考えをまとめることは苦手であった。武家社会の基盤にある御恩と奉公の関係が、承久の乱・元寇・幕府の崩壊と結びつけて考えられないなど、歴史事象は認識しているが、その背景や影響と結びつけて考えられなかった。	知識が豊富で、それをもとに発言しようと努力していた。2枚の絵を読み取る学習でも、それが 何を意味しているのか考えながら 発言することができた。足利尊氏に関して、裏切るのはよくないという感情的な意見が多い中、「不満のない世の中をつくりたかったから」と、その頃の時代背景を考え発言していた。	学習意欲があり、毎時間のワークシートに学習したことや自分の考えをびっしりと書き込むことができた。権力者側より 一般庶民はどのように感じているんだろう という視点で学習に臨んでいる。感情論にならずに、論理的に考えており、後鳥羽上皇・後醍醐天皇の読みの甘さを指摘していた。政権から離れた朝廷(天皇)の存在に常に疑問をもっていった。

<p>10時の学習の様子</p> 	<p>思いつきではなく、友達の見解に耳を傾け、関連づけて発言しようという意欲がみられた。「守護とかが力が高くなって、農民・商人の力が上がっていった。均等になった。差が縮まって自由に暮らせるようになった。」と発言し、下剋上の世の中を理解することができた。</p>	<p>前時の調べ学習で得たことが発言の中で生きていた。Dさんの「均等になった」という発言に対して、すぐに、「ここは、港に面しているから強くなっているけど、内陸の方の農民は物も入ってこないし、税をとられているから、均等にはなっていないと思う。ここは港町だから恵まれている。」と反論し、新たな論点を投げかけていた。</p>	<p>よく集中して、話し合い活動に臨んでいた。友達の見解にうなづいたり、首を横に振ったりと、よく話を聞いていたことが感じ取れた。Dさんの「均等になった」という発言に対して、「自分たちで政治をするということは、自分たちに負担がかからない。でも、絵には貧しい人たちもいるの？」と反論し、農民の自治について疑問をもっていた。</p>
<p>教師の支援</p>	<p>机間指導中、調べて考えたことがワークシートに書けていることをほめ、意欲的に話し合いに参加できるようなきっかけをつくった。また、「室町時代の港町」の絵の中で、解決しきれない疑問について、10時の最後に質問したので、そのことを調べてみるように促した。次時にそのことについて得た情報を友達に知らせることができた（支援6、9）。</p>	<p>ここまでの知識は豊富だが、10年後、20年後の世の中については、「貧しい人と豊かな人がぶつかり合う。」というおぼろげなものだったので、具体的にどのようなことなのか、再度声をかけた（支援6）。</p>	<p>話し合い活動を通して、農民の自治にもリーダーが必要になってくると予想していたので、その気づきを大切にするように助言した。また、授業後に、「幕府はどうなったのか？」という、Fさんには、これまでなかった視点が生まれたので、さらに調べてみるように促した（支援6）。</p>

考察

中学生であっても、絵などの視覚的教材を使ってイメージをふくらませやすくすると生徒の疑問も出やすくなり、それを学習のねらいに沿って学習問題にまで高めていくことができれば、より意欲的に学習に取り組むことにつながる。また、意外性のある学習問題がより話し合い活動を活性化させることにつながっていくことも確認できた。さらにこの実践のように御家人や庶民などの立場に立ってそれぞれの歴史的な事象を考えることは、中学校社会科がめざしている多面的・多角的な見方や考え方を育てる一つの方法となるであろう。

(3) アンケート結果から

検証授業を行った3つのクラスで、単元終了後、「社会科における話し合いについてのアンケート」を行った。図4のように、9割近い子どもたちが話し合い活動の意義について肯定的にとらえていた。

具体的に話し合いがよかったこと理由として、図5(上)のような声が集まった。話し合いがもともと好きな子はもちろん、話し合いが苦手な子も「意見は言えなかったけど、みんなの意見をノートに書いてよくわかった。(小6)」「意見は言わなかったけど、友達の意見を聞いて、自分は反対の意見が出てきてよかった。(中1)」と、友達の考えに触れ、自分の考えが深まることのよさを感じている。また、「自分の考えが深まる」の回答でも、「考えが広がる、考え直しができる、比較できる」など、子どもたちは様々な言葉で話し合いのよさを表現していた。

逆に困ったこと理由として、図5(下)のような声が集まった。自分の意見が言えないという悩みなど、伝えることの難しさを挙げる子が見られた。

最後に、今回のアンケートの中で、次の時間への意欲が感じられる回答の一つを紹介したい。「調べ学習で、自分が調べられなかったところまで調べてくれた人の意見を聞くと、ためになると思います。逆に私が調べたことで、人のためになっているかもしれないし、すごくうれしいです。それに自分の意見に賛成してくれる人が一人でもいると、『よかったなあ』とか『うれしい』とかいい気分になるし、授業の終わりには、『楽しかったなあ』とか、またやりたいという気持ちになります。次の時間が楽しみになりますね。(中2)」まさに、社会科の求めている学びの姿がここにあるのではないだろうか。

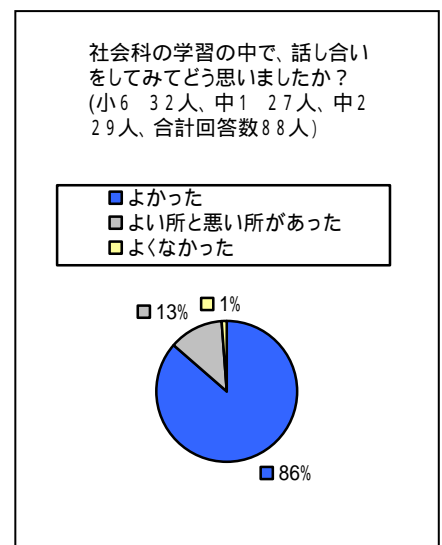


図4 検証授業後のアンケート

研究のまとめ

1 考察

(1) 話し合い活動が生み出す思考の深まりと意欲の向上

検証授業を通して、学習の中に情報を持ち寄って吟味する話し合い活動を入れることによって、子どもたちの思考の深まりや意欲の向上が確認できた。特に、単元の後半に設定した話し合い活動では、その時間までに学習してきた内容が知識となり、それに基づいたお互いの考えを感じ合うことでさらに子どもたちの思考も深まっていった。「次はどうなるのだろう」という思いをもち、次の単元が始まる前に自分なりに気になったところを進んで調べてきたり、わくわくしながら次の学習に臨んだりするなど、教師がめざしていきたい子どもの学習に取り組む姿を垣間見ることができた。

さて、年齢が上がるにつれて話し合い活動があまり好きではなくなるという傾向とは裏腹に、友達の考えを知りたいと思っている子が多数いるのは興味深い。社会科では、話し合いに至るまでの過程をさらに重視し、「知りたい」から「話し合いたい」と、子どもの気持ちがいっつも高まるように学習を組み立てていきたい。

(2) きめ細やかな教師の支援の必要性

「教師が意識したい4つの意欲場面と9つの支援」を意識しながら検証授業を行ったが、子どもたちがどのような思いで話し合い活動に参加しているのかを把握する意味でも効果があった。特に、「予想場面の保障」は、調べ活動や話し合い活動の動機づけとなるだけでなく、次の学習の見通しをもたせる大切な支援となった。また業間に支援をすることで次時の話し合い活動の方向づけとなったり、単元終了後に支援することで、次の学習の指針ができたりした子もいて、その子に合った支援が必要なことが改めて明らかになった。

(3) 話し合い活動中の葛藤

話し合い活動後、頭の中がごちゃごちゃしてしまったという感想をもった子がいた。一般的にその「混乱」には二つの要因があると考えられる。一つは、話し合うことで自分の価値観（道徳観）と社会的事象、現代と過去、さらに友達の考えと自分の考えの間で行ったり来たりし、持っている価値観が揺さぶられる場合。もう一つが、話題があっちこっちに行ってどこに終着点を見いだしていいのかわからなかったり、ただの答え探しに終始したが結局答えが見つからなかったりした場合である。後者に比べて前者には、葛藤があり、一人一人が自分のこととして考え、友達の考えも聞くことで、自分の考えを見つめ直す大切な「混乱」といえる。

2 今後の課題

(1) 話し合い活動が苦手な子どもたちに対する支援

まず、自分の考えを記述できる子には、机間指導の中でその子の記述した内容や考え方を取り上げ、教師が紹介し、その意見を基調として話し合いを展開する。また、記述できない子には、ノートに思いつきでもいいから書き出させ、自分との距離をとって客観的に吟味してみることの大切さを助言する。さらに授業の内容を簡単に図式化（どんな学習問題から始まったか、どんな意見が出たか、どの

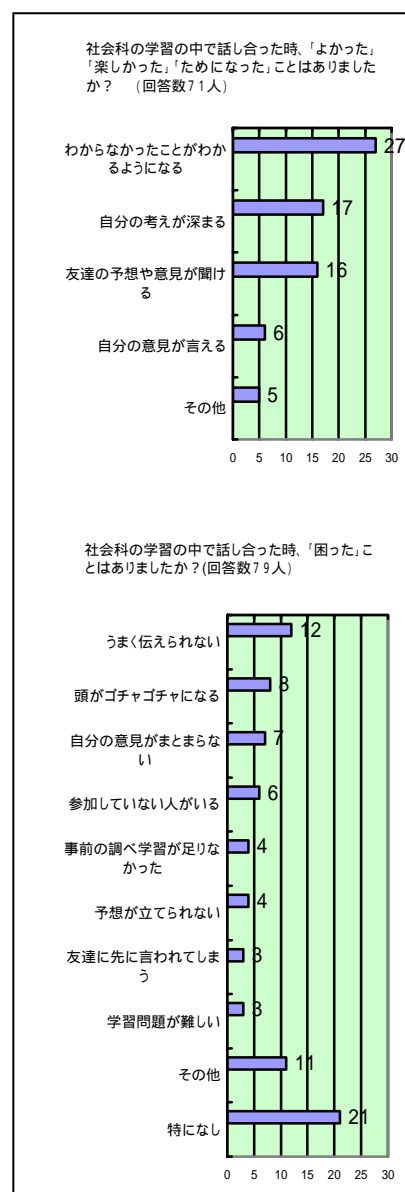


図5 検証授業後のアンケート

ように意見が繋がっていったか、どのように話し合い活動が終わったか、など1時間の話し合い活動の流れを書いたフローチャートのようなものでもよい)したものをつくり、その子の考えが話し合いの中のどの辺に位置しているのかを個別に話し合うという方法もある。これはあくまでも一例に過ぎないが、今後検討していきたい課題である。

(2) 歴史単元以外での検証

この研究では歴史単元の検証しかできなかった。例えば小学校3、4年の廃棄物の処理を扱う単元でゴミ処理の様子を選択して学習した場合、選択しなかった下水処理についても発展学習などで取り上げることによって、意欲を連続させて学習することにつなげていけるのではないか。中学地理の都道府県を扱う学習でも、「 県は、なぜ～なのだろう」という論理的追究型の学習問題を設定することで、より意欲的に調べたり、話し合ったりすることにつなげていけるのではないか。中学公民でも、論理的追究型から意思決定型の学習問題へ深めていくことで、さらなる意欲の向上につなげていけるのではないか。このようなことをさらに検証していく必要があると考える。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

有田和正『子どもの生きる社会科授業の創造』明治図書	1982年
北尾倫彦『意欲と理解力を育てる』金子書房	1984年
片上宗二『オープンエンド化による社会科授業の創造』明治図書	1995年
藤井千春『問題解決学習のストラテジー』明治図書	1996年
奈須正裕『学ぶ意欲を育てる - 子どもが生きる学校づくり - 』金子書房	1996年
波巖『発信型の新しい問題解決学習』明治図書	1999年
北俊夫・有田和正『対談・小学校教育課程 社会科の授業をどう創るのか』明治図書	1999年
筑波大学附属小学校・社会科教育研究部『これだけは教えたい基礎・基本』図書文化社	2002年
北俊夫『あなたの社会科授業は基礎・基本を育てているか』明治図書	2005年
有田和正『有田和正の授業力アップ入門 - 授業がうまくなる十二章 - 』明治図書	2005年
文部科学省「義務教育に関する意識調査」	2005年
国立教育政策研究所「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査」	2005年
川崎市総合教育センター「平成17年度川崎市小・中学校教育基本調査」	2005年

【指導助言者】

教材・授業開発研究所代表(川崎市総合教育センター専門員)	有田 和正
岐阜大学教育学部教授	北 俊夫
川崎市立小学校社会科教育研究会長(川崎市立平小学校長)	松田 幸夫
川崎市立中学校教育研究会社会科部会長(川崎市立中野島中学校長)	深田 肇
川崎市立中学校教育研究会社会科副部会長(川崎市立金程中学校長)	村尾 譲治
元川崎市立小学校社会科教育研究会長(川崎市総合教育センター特別研修指導員)	山木 利之
前川崎市立小学校社会科教育研究会長(川崎市立南河原小学校長)	横山 吉雄
前川崎市総合教育センター指導主事(神奈川県教育委員会子ども教育支援課指導主事)	稲毛 伸幸
川崎市総合教育センター指導主事	黒川 保之